

Ch. 23

Allport's "Living Inkblots": The role of defensive projection in stereotyping and prejudice.

Allport の“生きているインクブロット”:ステレオタイプ化と偏見における防衛的投射の役割

Leonard S. Newman and Tracy L. Caldwell

In J.F. Dovidio, P. Glick, & L.A. Rudman(Eds.) 2005 *On The Nature of Prejudice: Fifty Years after Allport*.
Malden, MA: Blackwell.

Rep. 小森めぐみ¹.

歴史的背景

- ❖ 1941年以降 ポーランドでナチスドイツによるユダヤ人の大量虐殺が行われるが、実際に虐殺に携わっていたのは、ドイツ人やナチではなく、ポーランド人²
- ❖ 1939年のソビエト侵攻³にユダヤ人が協力したことへの復讐という説明もあるが、証拠はない (Gross, 2001)

“地元の非ユダヤ教徒たちは、1941年にやってきたドイツ国防軍を熱狂的に歓迎し、ドイツ人に協力した。彼らは、1941年に自分たちがドイツ人にとった態度を、1939年のユダヤ人のソ連に対するふるまいについての話に投射しているようだ” (Gross, 2001, p.104)

Allport と集団間敵意

- ❖ 近年の集団間敵意の研究は、黒人差別の文脈で枠組みがされているが、*The Nature of Prejudice* は第二次大戦の影響をうけて書かれているため、反ユダヤ政策を議論の出発点としている
- ❖ また、この頃は精神分析が現在と異なる形で社会心理学に影響を与えていたこともあって、Allport は偏見を精神力学的に理論化し、その中でも投射⁴に注目

投射とステレオタイプ化・偏見

- ❖ 投射は社会心理学にとって魅惑的なトピックだが、過去半世紀間、ステレオタイプ化や偏見研究の中で中心になっていない(Hailton, Stroessner, & Driscoll, 1994; Monteith, Zauwerink, & Devine, 1994)
- ❖ 精神力学概念は、長い間実験心理学界ではタブー視

本章の内容

- ❖ Allport が投射をどのように扱っていたかに注目
- ❖ Allport が行っていた投射の分類を分析
- ❖ 投射が社会心理学の中で取り残されていった経緯、理由を議論
- ❖ 防衛的投射・ネガティブステレオタイプの発達についての最近の研究をレビュー、方向性を示す
- ❖ ここ十年の防衛的、無意識な過程への再注目に Allport も関連していることを提案

¹ 一橋大学社会学研究科

² もちろん、ユダヤ人救助にまわったポーランド人も多くいた

³ 1939年の独ソ不可侵条約で、ポーランドは秘密裡に東西に分割され、支配された

⁴ 自分の動機や特性を他人のそれに擬したり、なんとか説明付けたり正当化したりする傾向のこと(Allport, 1954/1979)

Allport's views on the psychodynamic approach (P.378)

Allport の主張

- ❖ 偏見は歴史・文化・状況・個人などの様々なレベルから分析が可能な多面的現象
- ❖ 精神力学的アプローチもそのうちのひとつであり、“個人内の無意識な心的オペレーション”を含む個人の内的動機要因を強調(Allport, 1954/1979)
精神力動理論の説明…自分を良く思い、脅威的思考を回避したいと思うことから偏見が発生
- ❖ Allport は自分の理論を包括的にするためだけに精神分析のアプローチを包含したわけではない
初期の研究(Allport, Bruner, and Jandorf, 1941)では、抑圧、合理化、分離、置換などの防衛機構を参加者の思考、感情、行動の説明に援用

精神力学と社会心理学

- ❖ 当時は社会心理学の中に精神力学の考えが多く使用されていた
Handbook of Social Psychology(1954)は精神力学の章を含み、16 ページごとに Freud を引用
Handbook of Social Psychology(1998)は精神力学の章を含まず、109 ページごとに Freud を引用
- ❖ Allport は様々なトピック (スケープゴートの選択, Glick, ch. 15 this volume; 偏見の個人差, Duckitt, ch. 24 this volume) に精神力学の考えを使っているが、最も顕著なのは投射

Allport on projection (P.380)

Allport の主張

- ❖ 人は自分に備わっている特性とまったく同じものをもっているがゆえに、ある集団がその性質をもつとって、その集団を嫌う場合がある
- ❖ そのような集団を糾弾し嫌悪することは、自分が自分自身の性質に不満があることの象徴
例) ユダヤ人の競争相手をずるく出し抜いても、“ユダヤ人は倫理的でないから”と正当化
例 2) 黒人女性と性的関係をもった白人男性が、白人女性と関係した黒人男性を激しく嫌悪

投射はなぜ社会心理学の中でそれほど中心テーマとならなかったか

- ❖ この分野における精神分析の理論化自体が行なわれなくなった
- ❖ Allport の行った投射の定義・類型化に問題があったため
直接的投射: 葛藤解決の一手段として、ほんとうは投射する本人の側にある情動、動機、行動をば、なんら罪もない他人(または集団)の側に帰すること(Allport, 1954/1979)
☆ 帰属された特性がターゲットにまったく当てはまらない
針小棒大の投射: 他人側にある性質を誇張する過程であり、当該性質は自分側にもあるに関わらず、そうとは気づかないことである(Allport, 1954/1979)
☆ 帰属された特性がターゲットに少しは当てはまり、それが誇張される
 - 特性がまったく備わっていないか、少しは備わっているのかを区別することは困難
 - 二つの投射は特性の当てはまりのよさという連続変数上に存在すると考えた方が単純*補足的投射*: 自分の心理状態を想像上の他人の意図ならびに行動へかこつけることにより、説明付
けたり正当化したりする過程(Allport, 1954/1979)

☆自分の内的状態を他人の行動の原因に誤って帰属すること

- 補足的投射のみが、自己概念への脅威によって駆動する過程
- 前二つの投射は、自分がその特性をもっていることに無自覚だが、補足的投射は何らかの外的ストレスから生じた内的状態の原因を知りたいと思う欲求から生じる

Developments since Allport: Problems with projection (P.381)

投射の定義や他の概念との違いは Freud 以来、現在まで曖昧 (see Sandler & Freud, 1985, pp.136-46) Holmes(1968, 1978, 1981) Allport 以降、投射について最も本格的に議論した心理学の文献

Allport の投射の種類 (補足的/直接的投射) をそのまま引き継ぎ、定義の明確化に努める

●基準が不適格であった為、直接的投射が存在しないことが明らかになるという結果

基準①特性所有 (人に特性が備わっているかを決定するための明確な方法はない)

基準②無自覚であること (何に無自覚であればいいかが不明確)

投射は様々な心的プロセスと相互関連しており、気付きレベルは各々異なる(Newman, 2001b)

☆Allport は偏見研究に投射を重要なプロセスとして考えていたが、定義や類型化の曖昧さのために、投射の認知・動機のプロセスが明確に記述できず、その後の研究は停滞

A New framework; A contemporary approach to projection(P.382)

最近の動き

社会的認知の言葉で投射を再概念化する動きがでてきている

Newman, Duff, & Baumeister(1997) 防衛的投射を思考抑制の副産物としてモデル化

・自分が望ましい人物ではないとわかると、人はその考えを押し殺すが、その結果かえってその考えのアクセシビリティは増加し(e.g., Wegner, 1992)、他者を知覚する際にそれが反映され、投射が起こる

・望ましくない特性や、それをもっていると思われることに対する恐怖があれば、たとえその特性を実際に“所有”していなくても投射は生起する

研究1: repressor は nonrepressor と比べて自分に備わるネガティブな属性に費やす時間が短かった

研究2: repressor は nonrepressor と比べて自分に備わるネガティブな属性を否定しやすかった

研究3: repressor は nonrepressor と比べて自分に備わるネガティブな属性を他者に投射しやすかった

研究4: 明白な形でプライムされた場合、投射は起こらなかった

研究5: 実験操作を用いた検討 (研究1~4は個人差を用いた検討)

研究6: ネガティブな特性について考えることだけでも (抑制教示なしで) repressor に投射が生じた

その他の研究

Mikulincer and Horesh(1999) 回避的愛着スタイル⁵をもつ参加者は投射しやすい

Smart and Wegner(1999) ステイグマを隠そうとする者はそうしない者より投射しやすい

Schimmel, Greenberg, and Martens(2003) “敵意を抑制した”と伝えられた参加者に投射の機会が与えられると、その後敵意へのアクセシビリティが低下し、自分は敵意的でないとは評価

⁵ 親密な関係への欲求を否定・抑制しがちな人

The role of projection in stereotyping and prejudice; A first study

Caldwell, Newman, Griffin, and Chamberlin(2001)

自分の集団に対する否定的な考えを抑制した成員は、他集団にそれを投射する

【方法】複数の参加者は同じ5つの特性（ポジティブ1＋中性2＋ネガティブ2）をもつタイプ（ε）と伝えられ、それについて議論した後、別のタイプの人々（γ）を曖昧な行動から評定。

ただし、ネガティブな特性のうちの一つについては議論の間発言・思考を抑制するよう伝えられる

【結果】参加者のγに対する評定のうち、抑制されたネガティブ特性は、もう一つのネガティブ特性よりも多く備わっていると評定され、この傾向は抑制を几帳面に行った集団⁶ほど顕著だった

Projection as a group-level phenomenon

集団プロセスと投射

- ❖ ステレオタイプは対人プロセスを経て形成される(Schaller & Conway, 1999)、
Allport(1954/1979)“偏見は社会的な産物であって、社会的文脈を必要とする”
- ❖ しかし、投射については(Newman のモデル化以降も)個人的プロセスが重視されている
- ❖ 古典的な精神分析的アプローチでは、他集団の中傷を個別に動機付けられた人間が集まると、偏見が生じると説明(e.g., Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson, & Sanford, 1950)
Allport(1954/1979)“不安な人々が恐怖を共有し、想像した理由について同意すると、恐怖によって生み出された敵意が高まってしまう”⇨なぜそうなるかについては説明がない
- ❖ 偏見は集団の文脈で形成・維持、促進されたステレオタイプであるため、投射はステレオタイプ化における集団内のコンセンサスを説明する必要がある
Caldwell et al(2001)投射が社会的同意に至るプロセスを実証的に検討(本書 15 章も参照)

どんな特性を投射する？

- ❖ 特性にはそれぞれ違った特徴があるが、どんな集団においても頻繁に現れる特定の望ましくない特性が存在する(Newman, Caldwell, & Griffin, 2000)
- ❖ 歴史、経済、心理学的な変数の複雑な相互作用を通じ、それぞれの文化の中である社会的・心理的特徴が他のものより価値を高く or 低くみなされるようになり、それが投射に結びつく
- ❖ これに関して Allport(1954/1979)は、人はいつも“文化的な理想像とまったく反対の方向へと悪党を描く”と述べている(p.387)

誰に対して投射する？

全ての集団が同じ望ましくない特性をもつと中傷されるわけではない(Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick, ch.15 this volume)

特定の集団に対するステレオタイプを決定するのは、集団の**相対的な地位**と**関係性**(協力的/敵意的)

嫉妬的偏見：有能だが敵意的とみなされている少数派（例. アジア人、ユダヤ人）

⇒ターゲットは、不誠実、腹黒、利己的と知覚され、怖がられ、信用されない

温情的偏見：有能でも敵意的でもないとみなされている少数派（例. 伝統的女性）

⇒ターゲットは、あたたかくて子供っぽいと知覚される

⁶ 議論の中味のコーディングから判断

軽蔑的偏見：有能ではないが敵意的とみなされている少数派（例．黒人）
⇒ターゲットは、野蛮人として嫌われ、軽蔑される

個別の偏見的信念から偏見へ

- ❖ 集団の各成員達は防衛的なプロセスを経て、特定の他集団成員がどんな特徴をもっているかという仮説を前もって個別に形成した後、その偏見的信念を互いに話し合う
 - shared reality 仮説(Gardin & Conley, 2001) 人は“対人的に獲得された日常的経験の共有”を動機付けられている。それにより知識的欲求、関係性欲求が充足されるため
 - Larson, Foster-Fishman, and Keys (1994) 集団議論で最も話し合われるのは、共有された知識
 - Lambert et al(2003)他者が存在するなかで集団について考えると、その集団のステレオタイプが表現される頻度が高まる
- ⇒その結果、個人レベルで形成されていたステレオタイプは、集団レベルで発展・洗練されていく
+ 集団極性化プロセスや他のプロセスはその過程を強化

Has Allport been supported? Past, current and future directions in research (P.387)

過去

1954 以前 ステレオタイプと偏見に精神分析的アプローチでの注目がされる

権威主義的パーソナリティ(Adorno et al, 1950)：自我が弱く、常に防衛していなくてはならないような権威主義者が偏見を抱きやすい

●不運なことに、この研究は方法に欠陥があったため、批判の対象となった(see Duckitt, ch. 24 this volume)

1954 以降 ステレオタイプ化と偏見は、社会文化的アプローチまたは認知的アプローチで検討

- ・社会文化的アプローチ：両親、教師、友人、地域・文化的組織などの、態度・価値観をもたらす源泉から、ステレオタイプの信念がどのように獲得されるかを検討⁷
- ・認知的アプローチ：ステレオタイプを、日常的に接する膨大な社会的情報を単純化した際の副産物として概念化(see Fiske, ch.3 this volume)

☆精神力学的なアプローチは人間の認知を理解する際には用いられなくなり、感情や動機もステレオタイプ化や偏見の認知プロセスの解明の際には無視される

現在 最近になって、過去の知見のいくつかが最注目されている

- ❖ ステレオタイプは自分や自分の所属集団をよく思いたいという人々の欲求を反映して形成される(Yzerbyt & Cornielle, ch.11 this volume)

Fein and Spencer(1997) 動機付けられたステレオタイプ適用の研究

自己イメージに脅威を受けた後に自己概念のポジティブな側面を高揚される機会のなかった参加者は、スティグマ化された集団メンバーの評価を下げ、それによって自尊心を向上させた(see also Kunda & Sinclair, 1999)

⁷ 最近の権威主義的パーソナリティ研究もこちらの文脈からの検討がすすんでいる(see Altemeyer, 1988)

☆その他、ムードや情動(Bodenhausen, Mussweiler, Gabriel, & Moreno, 2001; Smith & Mackie, ch.22 this volume)や、ステレオタイプの使用を抑制しようとする動機(Devine, ch.20, this volume)がステレオタイプ化や偏見に及ぼす影響の検討が行われている

未来

- ❖ 人は必ずしも自分の偏見の源泉や表明に自覚的でない(Fiske, ch.3 this volume; Rudman, ch.7 this volume)
- ❖ 他集団に対する態度や信念の無自覚的な側面についての研究は、更に興隆(Devine, 2001; Greenwald et al., 2002; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 2000)。今後もすすんでいこう

☆ステレオタイプがより暗黙的な過程であることについて Allport は驚きはしないだろうが、それを明らかにした新しい方法(Elgi, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)については好奇心をそそられることは間違いない

Conclusion (P.389)

Allport(1954/1979)は、ある集団の成員たちが、他者のもつ恐怖、フラストレーション、不備を投射する対象“生きているインクプロット”になってしまう場合があることを指摘していた。精神分析の考え方は、その後の偏見研究の主流からは外されてしまっていたものの、近年再注目されている。その中でも防衛的投射への興味は高まっている。しかしながら、ステレオタイプ化における投射の役割を完全に理解するためには、様々な側面からの検討が必要である。